

(題目) バーナード・ウィリアムズの功利主義批判

(氏名) 渡辺一樹

(所属) 東京大学人文社会系研究科

① 主題

「我々がその語について何も耳にしなくなる日は遠くない」。バーナード・ウィリアムズの有名な言葉に反して、我々は功利主義について語りつづけている。功利主義は、単純な原理によって一貫したかたちで、実践的問題について回答を与えるのであり、その理論的単純性と実践性が魅力であろう。その単純性によって、しかし、我々の倫理にとって欠かせないものが失われるのではないか。ウィリアムズはそのように問い、功利主義的視点の問題を指摘した。功利主義的視点は我々を疎外する。これがウィリアムズの問いであり、それは、「功利主義が直観に反する帰結をもたらすことがある」といった伝統的な功利主義批判とは異なる。功利主義は、ウィリアムズが指摘するところによれば、時おり暴走するものを超えて、そもそも受け入れがたい視点を我々に強制するのである。本発表が主題とするのは、そのような、バーナード・ウィリアムズの功利主義批判である。

ウィリアムズは 1973 年の 'A Critique of Utilitarianism' とそこで提示された「インテグリティからの批判 (Integrity objection)」(あるいは総督府功利主義批判) いらい、功利主義の最大の批判者として知られている。彼の功利主義批判は、とはいえ、そこでの論点にとどまらない。「道徳的運 (moral luck)」や「ひとつ余計な思考 (one thought too many)」といった彼の有名な議論は、功利主義への有力な反論にもなりうる。発表者は、そのように広範なウィリアムズの議論を功利主義批判として整理・検討する。

② 目的

本発表の目的は、ひとまず、ウィリアムズの功利主義批判を整理し、その哲学的な意義を探るものである。この第一の目的においては、「インテグリティ批判」の理解・擁護と、先述した多様な論点の整理を目指す。つまり、「インテグリティ批判」は、功利主義的視点そのものを問題とするラディカルなものとして理解されるべきであり、また、「道徳的運」といった論点は功利主義的視点の問題と関わる、と発表者は考えている。そのうえで、ウィリアムズの批判に対する、ジョン・ハリスらによる熾烈な反論に応答したい。

本発表は、第二に、ウィリアムズの議論を実践的な文脈に位置付けることを目指す。ウィリアムズの功利主義批判は高度に理論的なものであり、現実の実践的問題との関わりが不明に思われるかもしれない。とはいえ、それが功利主義的視点そのものを問題とするかぎり、実践的・応用的問題にも批判は関わるはずである。そのことを示すために、本発表は、ウィリアムズの議論の整理において、応用倫理的な事例への言及を試みる。

こうした作業をつうじて本発表は、最後に、ウィリアムズが功利主義批判において依拠す

るところの「倫理 (ethics)」の概念を素描したい。功利主義がその単純性によって失わせるところの複雑な「倫理」とは何であるか。かかる「倫理」の内容を示唆することを、本発表は目指す。

#### 参考文献

- Williams, Bernard [1972] *Morality: An Introduction to Ethics*, Cambridge U.P.
- Williams, Bernard [1973] 'A Critique of Utilitarianism' in Smart, J. J. C. & Williams, Bernard (1973). *Utilitarianism: For and Against*. Cambridge U.P.
- Williams, Bernard [1982] *Moral Luck: Philosophical Papers 1973-1980*, Cambridge U.P.
- Williams, Bernard [1985] *Ethics and the Limits of Philosophy*, Cambridge U.P.
- Davis, Nancy [1980] 'Utilitarianism and Responsibility' in *Ratio* (Misc.) 22 (1):15
- Harris, John [1974] 'Williams on negative responsibility and integrity' in *Philosophical Quarterly* 24 (96):265-273.
- Singer, Peter [1993] *Practical ethics*, Cambridge U.P.